（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	牛久　晴香
論文題目	ガーナ農村における地場産業の形成と発展に関する研究 －ボルガ・バスケットの事例－		

（論文内容の要旨）

本論文は、ガーナ北東部のボルガ・バスケット産業がいかにして形成され、発展してきたのかを分析することをつうじて、ガーナの小農社会がグローバルな消費市場にいかなるかたちで接続してきたのかを明らかにすることを目的としている。

第1章では、本研究の背景と目的を示した。先行研究においては「グローバル」と「ローカル」をそれぞれ一枚岩的な存在としてとらえ、ローカルな社会はグローバルな市場に包摂されるか自律を維持するかという二律背反的な議論に終始する傾向があった。それに対して本論文では、人びとの輸出用バスケット生産へのたずさわり方や、取引の具体的な進め方に着目して、複数化する「グローバルな消費市場」と多様な人びとの織りなす「ローカルな生産地社会」の接合の実態を実証的に解明することを目的とした。

第2章では、調査地の概要を示した。熱帯雨林地帯で植民地期に産業が発展したガーナ南部地域と、サバンナ地帯で産業が発展しなかった北部地域とでは生態的、社会文化的、経済的な差異があることを紹介し、ついで極北に位置するボルガタンガ地方の農村世帯は、農業やボルガ・バスケット生産、南部への出稼ぎなどを組み合わせながら生計を営んでいることを示した。

第3章では、国家政策・援助事業ならびに国外組織が、バスケット産業の形成と発展にいかなるかたちで関係してきたのかを検討した。ボルガタンガ地方の貧困状況の改善をめざした開発援助機関と、このバスケットに欧米市場での商品価値を見出し輸出を続けてきた国外の民間企業とが、ボルガ・バスケット産業の形成に大いに貢献してきたことをあきらかにした。また、現在は、欧米や日本を中心としたファッション市場やフェアトレード市場など、求める商品の性質が異なる複数の市場にまたがって、ボルガ・バスケットはひろく流通する商品となっていることを示した。

第4章では、ボルガ・バスケットの技術的側面に着目し、バスケットと地域の物質文化との関係を検討した。このバスケットはサバンナで培われてきたイネ科草本を巧みに加工する独特の技術のうえに生まれた商品であったこと、その技術が大量生産のための原料の転換や、現在の市場での広範な流通の礎となっていることを明らかにした。また、生産地域の内部で伝承される技術に差異があり、それはバスケット以前のものづくりの技術や歴史に影響されていることから、技術的な変化は市場との接合によっても一様には起こらないと指摘した。

第5章では、人びとがどのようにして編み手になり、生産にたずさわっているのかを事例にもとづいて分析した。バスケット生産には、世帯の生計戦略や、社会的役割、技術習得の意欲が異なる多様な村人が参入しているが、あくまでも「余剰」の時間や労力をふりむけるかたちで生産にたずさわっていることをあきらかにした。そして、編み手の「ばらつき」を当然とするような雰囲気や生産体制が、産業の裾野を広げ大量供給を可能としてきたこと、その裾野の広さが品質の底崩れを防ぐことに貢献してきたことを論じた。

第6章では、まずボルガ・バスケットには低価格・低品質から高価格・高品質までさまざまなバスケットに需要があり、それに応えるように編み手と仲買人の間で複数の取引方法が採用されていることを説明した。編み手は自身の必要や技術に応じて取引方法を自在に使い分けていたが、そのことはバスケットの集荷を不安定にする恐れもあった。そのため、仲買人の日々の商実践を検討して、彼らは編み手人数を積極的に増やすことによって個々の編み手の供給量のばらつきを均すとともに、対面的で対等な交渉によって異なる技術や経済事情をもつ編み手の協力を引き出そうとしていたことをあきらかにした。

第7章では、これまでの分析結果をとりまとめて、編み手が市場の変化によってもたらされた機会をうまく利用しながらも無理することなくこの地場産業にたずさわってきたこと、このような関わり方を許容する生産体制が産業の形成と維持に不可欠であったことを強調した。その体制で輸出個数を伸ばし、品質要件にも対応していくことが可能となったのは、生産者と企業の間のインターフェイスとして機能する仲買人の集荷実践と、個別対面的な働きかけによることを主張した。以上をふまえて、ローカルな生産地社会とグローバルな消費市場の現代的な接合において、社会文化的・経済的な相違を理解しながらアクターを結びつけていくミドルマンのような存在がますます必要となっていくことを指摘した。また彼らの実践は、包摂・服従でも自律・対立でもなく、アフリカ小農社会が市場と「ほどほど」のつながりを維持することの重要性を示していると結論づけた。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

サブ・サハラ・アフリカ諸国で最初に植民地支配を脱したガーナは、他のアフリカ諸国に先駆けて、独立後の種々の政治・経済的な変動を経験してきた。1970年代までに行き詰まりを見せていた独立初期の開発方針を転換して、1980年代には構造調整政策を導入し、2000年代に貧困削減戦略を展開して、経済はひとまず上昇基調にある。しかしながら、ガーナ政府が独立以来悲願としてきた、カカオ、金に代表される既存の少数の輸出産品に依存した経済構造からの脱却は、いまだ達成されていない。その達成のためには、非伝統的輸出産品に関わる産業の育成が必須である。貧困地域であるガーナ北部のボルガタンガ地方で振興された手工芸品ボルガ・バスケットの生産は、まさにその期待を担う地場産業である。ボルガ・バスケット産業の形成・発展していく過程は、ガーナの他地域ならびに他のアフリカ諸国にとって参照すべき事例であり、研究対象として大いに注目されてしかるべきであろう。このような研究対象に取り組んだ本論文は、以下の4点において学術的な貢献が認められる。

第1に、ガーナの独立後の開発政策の変遷を丹念に跡づけ、その中にボルガ・バスケット産業の形成・発展過程を位置づけたことである。ガーナ南部は降水量に恵まれ土壌も肥沃でカカオ生産が植民地期から行われており、またそれ以前から金産地として著名であったが、ガーナ北部は半乾燥地が広がり農業に不向きで、長らく南部地域への労働力供給源と位置づけられてきた。このような地帯構造を背景に、貧困対策としてバスケット生産が政府の開発政策に組み込まれたのは1980年代であり、その後に欧米の民間企業、フェアトレード組織、援助機関が参入して、産業基盤の整備が図られてきたことを、種々の政策文書、企業の広報情報そして現地での聞き取り調査に基づき、詳細に跡づけている。

第2の学術的な貢献は、ボルガ・バスケットの技術的な側面に関する考察である。申請者自らが製作技法を学ぶという参与観察法により、ボルガ・バスケットの編組品としての特徴を把握したのち、国際的な分類基準にあてはめて他地域の製品と比較検討している。このような地域横断的な考察と並んで、地域史的な分析も試み、ボルガ・バスケットは政府の開発政策に伴って新たに持ち込まれたものではなく、現地の編組品製造の技術が製作に活かされていることを、古老等への聞き取り調査から明らかにした。さらに、国際市場で求められる近年の多様な形状には、定番の基本的な形状からいかなる応用がなされているのかを、説得的に解明している。

第3の学術的な貢献は、アフリカ農村の社会経済に関するものである。アフリカ農村の世帯では生計活動を多様化してリスク分散を行う生計戦略が採用されていることを、先行研究が指摘している。本論文の対象地域においても、ボルガ・バスケットの生産に専業化する世帯はなく、自給用食糧作物生産や家事・育児を優先しながらも、数日で完

成できるバスケット製作を日銭の稼げる重宝な現金稼得活動として位置づけて継続していることを、長期の現地調査によって明らかにしている。北部ガーナ開発のために政策的に導入された水田稲作やトマト灌漑作と並んで、バスケット製作を生計多様化の新たな選択肢に組み込んで、社会経済変容を巧みに乗り切りながら生活を成り立たせている農村世帯のたくましさを、事例によってみごとに描き出している。

本論文の第4の貢献は、ボルガ・バスケットの流通の最末端に関わっている仲買人の果たしている役割に関する考察である。バスケット生産者がかなりの自由度をもって生産に関わっていることと、季節性のある小物として先進諸国市場で需要があるために当該季節に合わせた厳格な納期が定められていることには、かなりの乖離が存在する。そのような両者を接合するインターフェイスの役割を果たす存在として、仲買人に着目している。仲買人は国際市場の論理を生産者に一方的に押しつけず、生産者の行動様式に理解を示しながらも納期に間に合わせる集荷方法を採用していることを、説得的に分析している。

以上のような4点の学術的な貢献が認められる本論文は、いまだ研究蓄積の少ないアフリカの製造業部門、なかでも農村手工業部門を対象として実証的な知見を提供する先駆的な研究であると、高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年5月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。